

編 集 後 記

昨年6月より編集委員を拝命いたしております。自分も若い頃には症例報告をまずは臨床神経に、と目指していたことを思い出します。その頃は原稿はすべて原稿用紙に手書き、そして文献も図書館で Index Medicus の頁を繰って調べるしかなかったわけで、立ち所に PubMed で検索ができる今とは隔世の感ですが、今も昔も良い論文の書き方は同じでしょう。Jun Kimura 先生から教わった言葉に“Have something to say. Say it. Stop as soon as you have said it.”というのがあり、若者にいつも強調しています。査読でも、若者の論文の直しでも、何だか色々和前置きが書いてあったり、考察で延々とどうでもいいことが続いたり・・・というのは定番です。「考察はこの1/3の長さに!」と査読で指示することも多いです。要は言いたいこと = “something to say” = “Neues” が何か? であって、その Neues に関係することにイントロも考察も極力絞ることが何より重要です。

昔、何が言いたいのかよくわからない論文の査読で、「この論文の Neues は何ですか?」と問いかけたら、「Neues

はないのですが・・・」という返事が来たことがありました。もちろん、即 reject です。新規の遺伝子変異、本邦初例である必要はない。どんな小さなことであってもいいのです。あなたが見つけた「世界初、もしくは、日本初のこと」があるはずです。それが Neues です。そのときに論文にする価値が生ずるのです。その Neues が何なのかをはっきり意識しながら、すべてをそれに集束させて行く感じで論文を書いて行けば、自ずと優れた論文となることは間違いありません。その他、「要旨のある論文に、『終わりに』や『結論』はいらない」とか、考察で「誰々がこう言った、誰々がこう言った」という羅列はよほど画期的な文献以外は避けるとか、論文執筆には様々な tips があります。

英文論文がどうしても重視される今日、和文誌は、若者の訓練が主な役目でしょう。それでも、臨床神経の症例報告を書いて、そして指導者・査読者とやりとりするなかで学べる、論文を書くことの「神髄」は、英文論文にもきっと役立つはずです。皆様奮ってご投稿下さい。

(園生 雅弘)

〈編 集 委 員〉

編集委員長 鈴木 則宏 編集副委員長 河村 満
編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 亀井 聡
瀧山 嘉久 西野 一三 野村 恭一 星野 晴彦
編集委員(幹事兼任) 園生 雅弘 高尾 昌樹 森 秀生

「臨床神経学」	第54巻 第7号	平成26年7月1日発行	
編 集 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル	一般社団法人日本神経学会	
発 行 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル	高 橋 良 輔	
印 刷 所	〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入	中西印刷株式会社	

発 行 所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
日 本 神 經 学 会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス: <http://www.neurology-jp.org/>